

コミュニケーション現象の解明に向けて
——コード・モデルから Goffman へ——

上原麻子

Toward an Explication of the
Communication Phenomenon:
From a Code Model to Goffman

UEHARA Asako

This study attempts to clarify the complex phenomenon of communication by applying Goffman's micro-functional analytical model on flow of conversation. The model consists of two phases of the interaction mechanism: One is pan-cultural "system constraints," and the other entails, culture-bound "ritual constraints." The specific objective is to provide evidence showing that people over the world have the same mechanism of face-to-face communication, but its process may vary from intracultural interaction to intercultural communication. This paper is divided into five sections. The first section delineates both theoretically and empirically how the basis of communication is non-linguistic. The second section presents an argument on the importance of interactive approach by criticizing fixed and formalistic units of linguistic and conversational analyses. The third section deals with the "system constraints" of which critical requirements are elements of meta-communication. The discussion includes the theory of relevance constructed by Sperber and Wilson. The fourth section deals with "ritual constraints." It shows several examples of culturally different communication patterns which affect the system constraints and consequently change their function and communication process. The final section is an overview and a brief discussion on meanings of a universal communication pattern of "turn-taking" and human plasticity.

キーワード: 異文化コミュニケーション、コミュニケーション、相互作用研究

はじめに

異文化コミュニケーション¹⁾論の研究は、1990年代に入り従来の統計技法を用いた「客観性」(objectivity)を目的とする調査に加えて、現象論、解釈学、ポストコロニアリズムなど多彩な記述的アプローチの分析が盛んになってきている(Carbaugh, 1990; Collier, 2000; Young, 1996)。記述的アプローチをとる研究者らの多くは、コミュニケーションは人により構築され流動的で固定されたものでないことを理論的背景として研究を積み上げ、この学問領域の理論・方法論に新たな幅を付け加えている。そうした試みはこの領域の進展への寄与である。しかしながら、方法論の別を問わず、異文化コミュニケーション領域の研究のほとんどは、文化毎のコミュニケーションの特徴や、対人間の異文化接触による政治・社会・心理的現象の分析というマクロなアプローチである。コミュニケーション現象が複雑であるといわれているにもかかわらず、研究の焦点をマイクロに話し合うことそのものに当てたものは少ない。

そのうえ、異なるアプローチをする研究者ら(Carbaugh, 1990; Gudykunst & Kim, 1984; Knapp et al., 1987)も一致して、1980年代以来、異文化コミュニケーションも同じ文化的背景を持つ者同士のコミュニケーションも、そのプロセスは同じであると主張している。これは最初、過去20年以上にわたってこの領域の理論化に貢献をしたGudykunstとKim(1984)により提唱されたのであるが、主張の中心はコミュニケーションへの参加者の行動、理解のプロセスに、個人的な特質とともに、文化的特徴が大きく影響するということにある。提唱の中心自体は理論的にも実証的にも肯定的に捉えられるが、やはりマクロな主張である。今日、他文化には異なる発話形態が多数あることは明らかであるので、異文化コミュニケーションと同一文化の人々の相互作用のプロセスは微視的に捉えると異なる可能性があるのではないだろうか。

さらに、この領域の中心的な研究者ら(GudykunstとKim(1984, 1992;

Sarbaugh, 1988 他) は異文化コミュニケーション現象の説明として、メッセージの送り手と受け手の記号化 (encoding) と解読 (decoding)、フィードバック等々、いわゆる簡略化されたコミュニケーションの「コード²⁾・モデル」を使用している。ここでいう「コード・モデル」とは、人のコミュニケーションが言語および記号化された非言語の送受信によって行われるという仮説を指す。このモデルは20世紀中頃に発展した Wiener によるサイバネティクスおよび Shannon と Weaver の『コミュニケーションの数学的理論』を受容して、言語伝達の説明として提案されたと言及されることが多い。しかし、Sperber と Wilson (1986) によれば、このモデルの起源は西欧文化ではアリストテレスの『解釈について』にまで遡れ、後に記号論 (semiotics) に発展し、仮説とみなすことができなくなるほど確立されていて説明力を持つ。しかしモデルのもつ確かに見える説明力とは対照的に、それは人と人のコミュニケーションの記述としては十分でない。伝達は思考を音にコード化し、それを復元することで成り立っているのではない。そのため、このモデルはコミュニケーション現象について学ぶ者に誤解を与える可能性がある。

さまざまなアプローチの有意味性を否定するのではなく、むしろ、過去の研究対象としてあるいは哲学的理論のもとに自明のように扱われているコミュニケーションそのものをマイクロに分析して、人が話し合うということはどのような現象であるのかを明確にする必要があるようである。この現象のそうした基礎知識のうえに多彩な方法論による実証研究がより発展すると考える。

小論は、異文化コミュニケーション研究の進展に僅かにでも資するため、複雑といわれるコミュニケーション現象の解明を試みる。具体的に、異文化的背景を持つ者であれ同じ文化的背景をもつ者同士であれ、人はコミュニケーションのための同じ装置を持つが、伝達の現象は複雑に変容することができ、異文化における相互作用のプロセスに関しては今後もさらなる実証研究を重ねなければならないことを論述する。人の相互作用への文化的影響をマクロに見るのではなく、マイクロな研究がプロセスの解明に有用であろうと考える。そのため小論では、Goffman (1976, 1981) の話し

合うことに焦点を当てた相互作用研究の枠組みを用いて、伝達のプロセスが記号化、解読といった単純なものではなく多層的であること、そして、異文化コミュニケーションはその複雑さがさらに増幅する場合があることをできる限り詳細に分析するよう努める。

1 コミュニケーションの基底

理論的背景

最初に、コミュニケーション現象が、身体の応答性に基づく人と人の相互作用であることを明らかにしておこう。

Mead (1934) は、系統発生論的にコミュニケーションの始源を、犬のけんか、ボクシング、取っ組み合いなどに見られる2つの個体の、その目的が達成されるまでの一連の動きのなかに見出す。そうした係わり合いでは、両個体が全身で応答し合い、一方の動きが相手の次の動きの決定に大きな影響を持つ。その動きの連続のなかでは双方が影響を及ぼし合い、どちらが発し手でどちらが受け手などという区別は無意味になり、どちらも発し手と受け手の二つの役割をほとんど同時的に行う。Mead に従えば、他者の動きに対する人の応答性が人と人のコミュニケーションの根源である。

一方、精神医学の影響を受けたベイトソンとロイシュ (1989, 15-16 頁) は、微視的に対人コミュニケーションが行われている時には、次の3条件が満たされていると述べる。

- ① 一人あるいはそれ以上の人間が表出的行為を行う。
- ② その表出的行為が、他者により意識的、無意識的に知覚される。
- ③ その表出的行為が他者により知覚されたということが再帰的に表出者に確認される。

ベイトソンとロイシュは、人が何かを知覚すると認知環境に変化をもたらすことを、コミュニケーションの前提として、人が他者に知覚されたことを知覚することが人間行動の変化につながり、それをコミュニケーションの端緒とする。

さらに、Goffman (1976, 1981) は、分析の基礎単位を言語学者が独立文に、また会話や談話分析の研究者がしばしば「隣接対」(adjacency pair) や一まとまりの談話・会話の薄片におくことは、相互行為の視座からみると意味をなさないと批判し、相互作用研究にとっての基本単位は、「動き」(move) であるとする。ここで留意すべきは、Goffman が言語学と会話・談話分析を否定しているのではないことである。とくに後者とは相互作用論と一線を画してもいなく、分析の単位が応用の仕方により不適切になると相互作用論の視点を明晰に提示していることである³⁾。彼はこの「動き」の概念に対し、意図的に固定的な定義を避け緩やかな意味付けをしておくとして、次のように述べる。すなわち、「動き」とは、「参与する状況にあるなにかについて、他から区別されひとつの単位となる振る舞いで、どのような一連の話しもまたその代理となるものでもある」(1976, p. 272)。

対面で相手に対してなされるひとまとまりと判別される言葉あるいは言葉によらない表出が「動き」である。Goffman によれば、言明、問い、答えから、商取引の交渉、何かを教えるといったことまで「動き」として扱うことができる。応用に対し、かなりの幅が許されるが、この概念の中心は、相互作用の中に窺える他者に対する「勢力」(force) である。「勢力」という語で、Goffman は、発話に絡む情動を暗示してもいる。いかなる発話にも、たとえそれが冷静で認知的な伝達でも、情動が入るのである。「動き」の概念には、コミュニケーションが他者に影響を及ぼし相互に関連し合う身体の運動であり、また、感情が包摂されることが意味されている。

Goffman が、話しへの参加者がたとえ二人であっても対話 (dialogue) とは称せず、またその分析基本単位を「問い-答え」(question-answer) でも、「陳述-返答」(statement-reply) でもなく、それは最終的に、一連の「動き」(moves)——「動きに対する(応答としての)動き」——であると観るのは、相互作用現象を研究する者には意味深い。

上記のいずれの研究者も、自己と他者の知覚が交わって目的的に相互が動き、係わり合うことをコミュニケーションとしている。

実証研究

近年は、上述の理論的主張を実証する優れた研究も多くあるが、ここでは紙幅の関係上、Goodwin (1981) と Moerman (1990) の研究を挙げておく。Goodwin は米国でビデオ録画を用いて、人々の会話における「話順交替」(turn-taking) を一つの焦点にして研究を行い、次のようなおもな知見を得ている。

- 1) 会話の開始時において、話し手と聞き手双方が互いに応じ合える位置づけ (mutual orientation) を、通常、眼差しを使って行う。
- 2) 他者の注意が散漫でその位置づけができない場合、話し手は聞き手から適切な対応があるまで、ことばを繰り返したり、言いよんだり、とぎらせて沈黙をしたり、さまざまな働きかけをする。
- 3) 一見明らかな眼差しによる相互の位置づけがない場合でも、他の身体の動きによって互いに相手に注意をはらい、その代替機能を行っている。
- 4) 代替機能を使用している時には、両者の係わり方および発話の境界 (boundary) のあり方が、眼差しによる位置付けが行われる場合と異なり、話しの連続的な構造が違ったものになる。
- 5) 発話の間中も、他者の注意を自己の話しに向けさせ、自身の行為を促進するために、音素を長引かせた発音、笑い声、語、句、文、非言語行動の追加、追加の言い直し等々を行っている。

会話は参与者により創出、構築、維持されるのだが、Goodwin の研究をみれば、参与者がその流れから逸脱することは頻繁で、その逸脱に対して、参与者はさまざまなテクニックを使って、一方の当事者だけではできない作業に他者を戻すよう体系的な修正を試みている。ほんの短い話しの一片をも支える話者と聴者の共同参与の地位 (coparticipation status) は、両者による相互作用の動的な過程の中から生じており、その過程が分節化された言語の交換だけでなされるのではないことは明らかである。従来の研究が、会話は視線を合わせることから開始されると説明してきたことは、過度の単純化であり、現実の歪曲である。Goodwin の研究は、参与

者の働きかけにより、発話と身体の動きが見事に統合されて、会話が構成、維持される過程を実証している。

Moerman (1990) は米国の一組の若いカップル、彼らの子ども、そしてそのカップルの一友人が夕食を共にするビデオ録画を使って、彼らの相互作用を分析している。彼がとくに注目をしたのは 40 秒の場面で、それは以下のような内容から成っていた。

...急いで食べて食卓を離れた子どもを席に戻らせようと友人がその席を指差しながら、「椅子に戻って...」と叱る調子で発話すると、後を受けて、それまで下を向いて食べていた父親が顔を上げて「ステイーヴ」と子どもの名を促すように呼ぶ。

Moerman は、この実に短時間のやりとりを分析して、食事をするということと子どもへの対応という父親と友人の身体の動きが状況の中で調整されて、まるで振り付けをされて呼応する舞踊のようであると言う。この場面はすでに、会話分析のパイオニア、Schegloff が分析しており、「指差し」が「椅子に戻って...」と言う発話より先に行われていることを発見している。Moerman はこの論文で、まずジェスチュアが発話に先んじるという Kendon や Schegloff の知見を追認し、その一般化を支持している。興味深いことに、彼はさらにその知見を発展させ、この場面の分析により、ジェスチュアとはそれを行った個人の心理を知るための鍵ではなく、社会的な文脈の流れの中で生起するものであると実証した。すなわち、会話のプロセスというのは、話者の発話と身体の動きが内的に関連しあっているだけでなく、話し手の発話と身体の動き、そして(一時的な)聞き手の身体的動きが、それ以前の一連の発話・身体の動きおよびその他の文脈と関連しながら組織化・統合化されていくということなのである。

本節では、コミュニケーションとは、人の身体に備わる機能である知覚能力を前提にして、身体的、言語的応答性の上に成り立っていることを述べた。言語も身体的行為であるが、仮に二つの概念に分節し、身体的、言語的応答性を比較するならば、前者がより根源的であると言えよう。そして、人の相互作用について留意すべき点は、それが単に言語と非言語表出

を足した以上のものであるということである。次節では、Goffman (1976, 1981) がなぜ相互作用研究に、言語学、会話・談話分析研究が不適切になる場合があるというのか、その理由を記し、相互作用研究の視座およびその重要性を示す。

2 なぜ相互作用研究なのか

コミュニケーションをする者にとっての主要な目的は、相手の意図を理解することである。そのため、体面相互作用が参与者の目的に沿って組織化、構造化されるので、その過程を知ることは重要である。相互行為そのものを研究することで、コミュニケーション研究と言語学とは一線が画されるのだが、これはより厳密には言語学の分析はコミュニケーション理解の一部に有用であるというのが正確な意味である。そして、時に会話・談話分析の研究も相互作用研究に役立たない場合がある。相互作用研究の重要性を、具体的におもに Goffman (1976, 1981) の言語学と会話・談話分析の分析単位の使用のされ方に対する批判を通して見てみよう。

第1の批判は、言語学や会話・談話分析が研究の基本単位にする対象に文脈が欠如することがあることである。とくに、言語学の研究対象は文である場合が多いが、文になっていない発話は会話にはよく見られることである。そのうえ、独立文だけでは、発話の意図の同定は往々にして不可能である。たとえば、“Flying airplanes can be dangerous.” (Goffman, 1981, p. 30) について、考えられる複数の意味のどれが意味されているのか、この文からだけではわからない。同様に、“I just met him at the corner.” の文からは、I や him が誰なのか、the corner がどこなのか同定できない。つまり、ここでは文意 (sentence meaning) と発話の意味 (utterance meaning) が同じでないことを把握しておく必要がある。独立文は文法研究には有用であるが、相互作用研究には役立たない一つの理由がここにある。会話・談話分析では、会話や談話の小片が研究対象になることが多いが、文法研究と同様に、これらも文脈の欠如という批判が避けられないことが往々にしてある。

批判の第2は、発話は言語でも非言語によっても可能であるのに、非言

語要素が研究対象から排除されていることである。「今、何時ですか。」「5時です。」と言う簡単なやりとりにも、返答者が自分の腕時計を見ると言う動作が省かれていたり、また、質問者が騒音の激しいところで、時計をはめていない自分の腕を指して、通り掛かりの人に時間を尋ね、返答者が5本の指で時を教える場合のやりとりなどは、言葉だけに焦点を当てた言語学、会話・談話分析ではできない。

第3には、会話というものの柔軟性、縦横性を、会話・談話分析が基本的に研究単位とする枠組み(たとえば、「隣接対」、ひとつの儀礼など)では捉えきれない点があるということである。「隣接対」とは、「質問—答え」、「挨拶—挨拶」などと、先行発話のタイプによって、後続の発話のタイプが決定され形式化されていることである(Sacks, 1992)。しかし、実際の会話は、そのように固定的な形式を重ねて組織化されていくのではない。ここで、「隣接対」の代表のように扱われる「質問—答え」を見てみよう。まず、質問に対し、即座に答えが返ってこない例は、無数にある。以下はGoffman (1976)の事例を中心にしたものである。

- 1) A1: “It costs five.” (5(ドル)かかります。)
B2: “How much did you say?” (いくらって言った?)
A2: “Five dollars.” (5ドル。)
B1: “I’ll take it.” (いただくよ。)
- 2) D: “Have you ever had a history of cardiac arrest in your family?” (ご家族の中に心停止にかかられた過去のある方おられますか?)
P: “We never had no trouble with the police.” (警察の厄介などになった者はだれもいません。)
D: “No. Did you have any heart trouble in your family?” (いや。家族に心臓を患った人いますか?)
P: “Oh, that. Not that I know of.” (あ、それ。知る限りないです。)
- 3) A: (Enters wearing a new hat) ((新しい帽子をかぶって入室する))
B: (Shaking head) “No, I don’t like it.” ((首を振って)だめ、私そ

れ嫌い。)

4) A: Does he own my house? // hehhehh (彼が僕の家を所有して
るって? ヘッヘッヘ)

B: eheh heh heh (ウヘッ ヘッヘッ)

C: Yeah he bought it last—a week ago. I don't know, proba-
baly does. (やあ彼はそれを先...一週間前に買ったんだ。知ら
ないけど、多分そうだ。)

最初の2例は入れ子になっているやりとりで、第1の話者の問いに対す
る答えは最後になって得られる。1は聞き逃し、2は誤解によるものであ
る。3は発話にはよらないが、相手の所有する物によって引き出された返
答で、言葉だけを対象に研究するなら、返答が最初にくる事例である。4
は Jefferson (1972, p. 304) の“Side Sequences”からの例であるが、質問
という形をとるひとつの発話に「警句」(wisecrack)と「問い」という二
通りの意味が込められて、発話の流れが水平と垂直に発展していることが
提示されている。

さらに、教師の学生への問いは、Goffman (1976) や Mehan (1978) によ
るまでもなく、答え(新情報)を得るためのものでない。通常、それは相手
の学習度を調べるためになされるので、「質問—答え」の隣接対の本来の
概念から外れる。また、話者がひとりで問いを發し自身で答えを言うな
ど、以下のような最初に相手の注意をひきつけて、そして後続発話の解釈
に資する文脈となる修辭的な発話も新しい情報を引き出すための質問では
ない。

5) Do you remember the girl who talked to you in the theatre last
week? She is doing a first year biology course. (先週劇場で君に話し
かけた女の子覚えている? 彼女一年の生物学の授業取っているよ。)

6) Do you see that building over there? I've never been in that
planetarium. (あそこのあの建物見える? 私は一度もあのプラネタ
リウムに行ったことがないんだ。)

要点は、形式化された「隣接対」の概念に典型的に表される、後述の發

話は先行発話に制約を受けるという会話分析のひとつの主張は、普遍性を持つものでないということである。

Goffman は上記の例とは異なるが、会話において後続の発話が必ずしも直前の発話に対する返答でないことがよくあるために、“reach” (話し の勢力範囲) という概念を導入しているほどである。“reach” は、後続発話 が直前の発話とではなく、出会いの出来事すべてあるいはそれ以前の事柄 にかかわりがある場合などの分析のために構成された概念である⁴⁾。

会話は直線的にのみ進行するのではなく、よじれ、ねじれはつきもので、「隣接対」、談話の小片、挨拶などひとつの儀礼だけで分析できるものでない。むしろ、Goffman に従えば、「隣接対」や一連の会話の重要性は、会話がどのように組織化され、構造化されていくのか、その分析に役立つのである。そして、言語学の目的である文法や文意は、話者の意図を把握するために、話者が聴者に指し示す合図として有意味なのである。Goffman がいう“move”概念の重要性がここでも認識される。

3 プロセスを支える仕組み

本節では、相互作用の複雑な現象を解明するために、Goffman (1976, 1981) が人の話し合いを成立させるメカニズムには、二つの拘束が係わるとした、その2拘束を活用する。それらは、「システムの拘束」(system constraints) と「儀礼的拘束」(ritual constraints) という二重の制約である。ここで儀礼というものは、後述するように相互作用に含まれる文化的要素を意味するが、システムの拘束とは、コミュニケーションが行われるための装置で、汎文化的と考えられている。この二つの拘束がなぜ異文化コミュニケーションをも含めた相互作用分析の枠組みとして適切かという と、それらが相互に影響し合い柔軟であるためである。つまり、このメカニズムは閉じられたものでなく、異なる文化的儀礼が対面相互作用中に行われるとシステムの変形もありうるのである。システムの変形については、異なる発話形態と関連させて次節で述べる。ここではまずコミュニケーションの装置そのものを理解するために、Goffman (1976, p. 264) がシステムの拘束としてリストに挙げる要件 (system requirements) を見て

みよう。

システムの要件

- ① 適切で容易に解釈できるメッセージの送信と受信が双方向で可能である能力
- ② 伝達が行われる間、聴取を告げるあいづちを含めたフィードバック能力
- ③ 接触の信号[経路(channel)の接続を求めることを知らせる手段、求められた経路が現在通じたことを認める手段、また、それまで通じていた経路の切断手段。それらを参加者が同定し認定することを含む]
- ④ 話順交替の信号(メッセージの終了を知らせる手段と次の話者にその役割が引き継がれる手段)
- ⑤ 優先事の信号(再発話の要請、経路閉鎖を遅らす要求、さえぎりの手段)
- ⑥ 解釈の枠(frame)を作る能力(表層的には慣用的な表出から、皮肉、あてこすり、冗談などを聞き取らせる合図、およびそれを聞き取ったことを告げる聞き手の信号)
- ⑦ 応答者は知る限りの関連性のあることを正直に答える規範
- ⑧ 会話に直接参加しない者の、盗み聞き、騒音を立てる、対面者の視線をさえぎるといった行為の制限

①は、参加者に身体的疾患がなくふつうに話しができるという要件で、⑧は会話を進めるに必要な参加者を取り巻く物理的条件である。②から⑥の項目は、すべてメタ・コミュニケーション(meta-communication)(ペイトソン、ロイシュ1989)と括ることができる。とくに、②から⑤は相互作用の開始、維持、調整、終了の流れを問題なく行うための要件である。たとえば、次のごく簡単な通りすがりのやりとりを見て、システムがどのように作動するのかをみよう。

A: 今、何時でしょうか。

B: (腕時計を見て)5時です。

このありきたりな例も、「問い—答え」(厳密には「依頼—返答」という単純な発話交換がなされているだけでない。Bの発話は、a) Aの発話を物理的に正確に聞き、b) コミュニケーションの経路を開け、ほんの瞬間その係わり合いを維持することを了承した合図でもある。相互作用は常にこのコミュニケーションとメタ・コミュニケーションという二重構造からなる。

そして、人はコミュニケーションで、文意と発話の意図がさほど離れていない平明な話から、隠喩を含めた発話までをする。言明、質問、答えといった簡単な行為だけでなく、冗談、皮肉、からかい、あてこすり、侮辱、勧誘、脅迫等々無数の行為、出来事を創出するのである。⑥の「枠」(frame)とは、そうした目的を達成するために、話者が聴者に送る理解のための背景となる合図である(Goffman, 1974)。狭い意味では、話者が自らの表現の意味を表層と暗示という二重構成にして、発話の意図を他者に指し示す技術であるとも言えるが、より広く、話者の意図を聴者が理解しやすいように、その場の状況を解釈のための「枠(frame)に入れる」ことである。たとえば、次の二人の母親の会話を見てみよう。

母1: 「お宅の坊ちゃんは、よくおできになるからいいですわねえ。」

母2: 「いいえ。できないうえに、いまだにすねかじりで。お恥ずかしい限りです。」

第1の話者が、本気で誉めていなければ、これは皮肉であるし、また、第2の話者が本気で否定しているのか、単なる謙遜か、このやりとりだけからではわからない。そして、第2の発話に隠喩が含まれていることは、読者には明らかである。言葉の調子、目や顔の表情などの微妙な表出で、人は意図を「枠」に入れて伝達する。「枠」はまた、会話への参加者らが当座了承しているものから、突然逸脱することもありうるし、他者に確実に理解されるという保障もない。以下は「枠」の逸脱の1例である。

“It’s time for you to answer now,” the Queen said, looking at her watch: “open your mouth a *little* wider when you speak, and always

say ‘your Majesty.’” (「今度はあなたが答える番よ」と女王様は言っていて、自分の時計を見て次のように続けた。「話すときにはあなたの口をちょっと大きくあけて、そしていつも「女王陛下」と言うのよ。」)

“I only wanted to see what the garden was like, your Majesty——” (「私は庭がどんなだか見たかっただけなの、女王陛下——」)

“That’s right,” said the Queen, patting her on the head, which Alice didn’t like at all: . . . (from: Goffman, 1976, p. 287) (「そのとおりよ。」と女王様はアリスの頭を軽くなでたのですが、アリスはそれがちっとも好きではありませんでした。 . . .)

関連性理論

⑦は Grice (1975) のいう会話の「協調原理」(Cooperative Principle) の1原則 (maxim) である。この原則はまた、発話に表面的な関連性がなければ、隠喩、皮肉など他の関連性の可能性をも含意するという逆説によっても成立している。(⑦は⑥とも関係があるのである。) われわれの会話の多くが推論を用いて行われるので、その機能を保証するために、Goffman がこの原則を「装置」の要件としていることは、彼の相互行為に対する卓越した洞察と考える。

Grice の「4つにまとめられる原則」に関し、Sperber と Wilson (1986) はまた、その貢献を関連性と言う一語でまとめるという新たな貢献を行っている。そこで小論では、この要件を Sperber と Wilson の『関連性理論』の核でもある、推論と関連付けて論じる。それを理解するには、文意と発話の意味(意図)が相違すること、後者の同定には文脈情報が必要なことが2節で議論されたことを思い出そう。なぜ文脈情報が必要なのか、この過程を明晰に分析した Sperber と Wilson (1986) は、その著『関連性理論』において、人が他者に話しをすること、すなわち、意図を伝達することを、「意図明示推論的伝達」(ostensive-inferential communication) と呼び、これを次のように定義した。

意図明示推論的伝達: 伝達者は刺激を作り出し、この刺激によって聴者に想定集合 {I} を顕在化、もしくは、より顕在化する意図を持つこと

を自分と聴者相互に顕在化するようにすること。(Sperber & Wilson, 1986, p. 63)

ここでの刺激とは、言葉あるいは言葉以外による表出で、想定集合{I}というのは話者が伝えたい情報である。言葉による表出は、語あるいは文の音声表示と意味表示を組み合わせたコードであるが、この言葉あるいは言葉以外による意味表示と発話によって伝達される思考の間には隔たりがある。Sperber と Wilson によれば、その隔たりは推論によって埋められる。想定集合は文脈と結合して発話の意図を含意するので、聞き手の推論を容易にするために、話者は発話が親密なものであれ、対峙的であれ、平明なものであれ、隠喩的であれ、まじめに伝達しようとする限り、情報意図すなわち発話の意図と関連性のある表出をする。それゆえ、想定は文脈中での文脈効果が大きいほど、また、文脈中での処理に要する労力が小さいほど、その文脈中で関連性が高くなる。

Sperber と Wilson は、文脈の多くが心理的実在 (psychological reality)、つまり記憶の内容と物理的環境からの情報に依るとしている。しかし、文脈に関して重要なことは、それが構成的でもあることである (Blakemore, 1992; Bruner, 1983; Goffman, 1981; Sperber & Wilson, 1986)。次例の質問者は、発話の前にその建物がプラネタリウムであることを知っている必要はない。文脈が構成的であることはまた、話し合うことが共通の認知環境を増大させるという Sperber と Wilson の主張に対する一つの論拠にもなる。

A: Have you ever visited that building over there? (あそこにあるあの建物に行ったことある?)

B: I've never seen a planetarium. (私はプラネタリウムを見たことがない。)

また、上記の定義から、その表出は伝達したい情報内容とともに、話者がそれを伝えたいとする伝達意図との二重構造になってい、この両者が揃って初めて意図明示的伝達になることが言われている。そしてさらに、

それらが話者と聴者の双方に明らかにされるといふ多重の意味が示されている。意図明示推論的伝達における話者の側の二重構造を Sperber と Wilson の例で示すと、次のようになる。メアリーはヘアー・ドライヤーが故障をしたのだが、公然とピーターにその修理を頼みたくないの、彼が部屋に入ってきたらすぐ目につくテーブルの上に故障の個所が見えるようにして置いておく。つまり、これは修理してくれればいいというメアリーの情報意図は提示されているのだが、伝達意図は明示されていない。そのため、これは意図明示的伝達ではないのである。

意図明示推論的伝達において、伝達意図は Goffman のいう「装置」のメタ・レベルに関係するが、情報内容と伝達意図が話者と聴者の双方に明示されるということは、話し合うということが、話者と聴者双方の認知環境に変化を与えることであることが意味されている。

意図明示推論的伝達を分かりやすくするため、彼らの用いた例をひとつ紹介しておこう。Sperber と Wilson の関連性理論は、言葉による表出を扱っていることが多いが、下記の例からも解るように、言語と言語以外の表出による人の意図的伝達一般が推論によってなされることを論述している。

メアリーとピーターが公園のベンチに座っている。ピーターが後方に体をそらし、ピーターはメアリーの認知環境を変える。(つまり、ピーターはメアリーにある現象を提示する。)そこにはいろいろな物の中で、メアリーがベンチに座ったときに気づいていたアイスクリーム売りと、これまで会ったことのない散歩をしている普通の人と、メアリーの知り合いのウィリアムがいる。彼はちっとも面白くない人物である。この3人それぞれに関する多くの想定が程度こそ違え、メアリーに顕在的である。(しかし、他の2人とは)対照的に、ウィリアムこそがメアリーが注意を払うことになる特定の現象である。...ピーターの行為は彼がある特定の想定をメアリーに顕在化しようと意図しているということを彼女に対して顕在化したのである。これは意図明示行為で、この行為にも無言のうちに関連性が保証されているために、メアリーは新しく顕在的になった想定のうちどれが意図的に顕在

化されたかを推論することができる。(Sperber & Wilson, 1986, pp. 48-49)

意図明示行為は、それが言葉であれ、身体的表出であれ、人の思考と情動についての証拠を提供する。それによって伝達がうまくいくのは、その行為が関連性の保障を含意しているからである。

「装置」についての要約

Goffman のいうシステムの拘束をまとめよう。そこには対面相互作用というメカニズムが作動するための物理的、身体的、技術的な要件が挙げられていた。しかし、各要件を検討すると、相互作用現象が生じるということは、それらの単なる総和でないことは明らかである。この拘束を通して相互作用の多層性を見ると、それは言葉と言葉以外の表出から成り立つだけでなく、発話の表意とメタ・コミュニケーションのレベルの二重構造も見られた。さらに、表意は含意 (implicature) を内包し、両者の間にも乖離があった。そして、表意と含意の隔たりを埋めるのは推論であるが、それは文脈なしには成立しない。話者が自身の意図を表意に変えるときも、聴者が話者の意図を文脈を利用して把握するときも、相互に共通する認知環境を念頭においているはずである。ここに認知のレベルにおける間主観性 (intersubjectivity) が介在する。これはまた同時に、伝達とは人が「今、ここ」(here and now) での相手の心を透視する「相互知識」(“mutual knowledge,” Clark & Marshal, 1981) を持ち得ないので、話者と聴者の間で、コードと文脈の選択について、ある程度の調整を必要とするものであり、さらに、互いの認知環境に変化を及ぼすことであることを意味している。

Goffman のいう二つの拘束の一方を見ただけであるが、実に、相互作用とは単純な記号化 (encoding) と解読 (decoding) の連鎖ではないことが分かる。

4 文化によるシステムの変容

儀礼的拘束

前節で見た相互作用のシステムは、会話の基本型とも考えられる話者と聴者の役割分担が明確で、効率的な「話順交替」システムの発話形態を基に成っていたと考えてよい。しかし、そのシステムは柔軟で、先に見た会話のよじれやねじれにも、また本節に見るような異文化でのさまざまな発話形態にも変容しうる。その変容のおもな基因となるのが儀礼的拘束である。そこで、ここではまず Goffman (1976, p. 267) が挙げるこの拘束に関する3項目を以下に見よう。

- ① ひとつの行為は、行為者の性状と相手に対する評価、および自身と相手の関係性についての情報を暗黙裡に伝える。
- ② 潜在的に攻撃的な行為(人間の出会いは、常にこの危険性をはらむ。たとえば、単に、通りすがりに時間を尋ねるだけでもそうなのである。)は、行為者の理由付けや弁明により修復されうるが、その修復はその行為の目的が適切に成就される以前に、その行為を受ける側から、十分了承したことが表明されなければならない。
- ③ 迷惑を蒙った側は、一般に、相手からの相応な処置がありそうでもなく、また、相手が他者にとって受け入れがたい事情を創出してしまったことを示す何らかの手段をとらなければ、修復をするよう勧める必要がある。でなければ、すでに伝達されてしまったことに加えて、儀礼的決まりの維持への他者の失策に対し、屈服してしまったかのように解される。

3項目は、いかなる相互作用も対人関係面に関する制約があることを表している。まず①で相互作用における行為には、含意と共に行為に提示されている考えおよび相手に対する話者の態度が表れることを示している。そして3項目全体、とくに②と③で、人の出会いそのものに潜在的に危険性をはらむことを指摘している。その危険性を解消もしくは低減する目的で、たとえば、人は挨拶という儀礼を考案した(オルテガ 1989)。しかし、その挨拶の一言も Goffman のいうように、話者の人柄、相手に

対する評価、両者の関係性を伝える。話者のたった一言、何気ない行為も、相手にとって多大な迷惑、攻撃となる可能性を持つ。人は通常そのような事態を避け、自身がまともな (decent) 人間であることを他者に伝えるためにも、言葉、振る舞いに配慮し、社会的規範(コード)の遵守に努めるのである。3節に見た時間を尋ねるやりとりは、儀礼的拘束をも考慮に入れると、個人により状況によりさまざまな変形があるが、普通、次のようになされる。

- i) A: すみませんが、今、何時でしょうか。
- ii) B: (腕時計を見て) 5時です。
- iii) A: どうも(ありがとう)。
- iv) B: いや。(軽くうなづくだけか、あるいは両方)

A は最初に依頼の発話をするのであるが、その前に i) 他者に突然近づくとこの潜在的な危険性を中立的なものに緩和するための修復を「すみません」の一言で図っている。ii) B はその緩和策の受け入れをする。iii) 返答をくれたことと、A の真意を誤解しなかったことに対する感謝、iv) 十分な感謝が述べられたことだけでなく、A がまともな感情の持ち主であることを認めたという表示である。このように、ほんの短い係わりの間にも、人は儀礼を発達させ、自他の体面の尊重、危険性の回避の方略を生み出してきている。明らかにこの方略は、文化によっても異なる。

文化的に多様な発話形態

ここで、儀礼的拘束とシステムの拘束の関連を検討するために、文化的に異なるいくつかの発話形態を見てみよう。すべて話順交替、つまり、発話形態といえはこの形態が挙げられるほど、普遍のように考えられているやりとりのシステムの変容である。

1) 最初は、アタパスカ語を話す北米インディアンの一族、アサバスカン (Athabaskan) の事例。通常、多くの文化で人が体面で出会うと挨拶を交わす。日本でも米国の主流文化においても、よほど険悪な関係にある以外は、挨拶には挨拶を返すのが規範である (Goffman, 1963)。しかし、

Scollon ら(1990)によると、アサバスカンにはこれは通用しない。アサバスカンは親しい人とししか挨拶を交わさない。彼らにとっては話し合う前に関係構築をすることが重要で、見知らぬ人と話しをすることは不躰である。見知らぬ人が話しかけた場合、彼らは、沈黙、つまりコミュニケーションの回路を開けないことで、礼儀正しい振る舞いをする。

2) 日本における教師と学生のやりとり。教師と学生の「質問—返答」隣接対は、教師にとって新情報を尋ねるものでないゆえに、一般に、「質問—返答—評価」のパターンになるといわれている(Mehan, 1978)。しかし、日本の大学の授業では、教師の質問に対し、返事が返ってこないことが頻繁にある。たとえ、教師が名指しをしてもである。眼差しすら避け、回路を開けない。「質問—評価」のパターンになる。真意は目立ちたくない、分からない、あるいは自信が無いなどなのかもしれないが、この発話形態は状況が就学の場であるだけに、実に特異に映る。しかし、厳しい競争社会にありながら、表面上の調和を文化的価値とする社会で身を処する1方略とも考えられる。

3) アフリカ、ザイール共和国の焼畑農耕民ボンガンドの事例。木村(1997)によれば、熱帯雨林の木々を切り開いて作られたボンガンドの村は、人々が大きな声で叫ぶと村中に響き渡るほどの大きさで、村人は「ボナンゴ」と呼ばれる独特の演説に似た大声の発話を行う。それが特徴的なのは、内容が愚痴などのように、わざわざ人に伝えるまでもないようなものが多いうえに、聞く人は聞いているという態度を表に現さないところにある。木村はこの発話形態に「投擲的」という名称を与えている。この場合、話者に情報意図と伝達意図が仮にあっても、ボナンゴに対して応答を期待していない。木村によれば、これは他者の考えを忖度することで生じる相互作用の限りない不安定性に対して、「打ち切りの方略」を使うという「高度にソフィスティケートされた文化的構築物」(441頁)である。木村は、聴者に焦点をあてて、その態度を「儀礼的無関心」(“civil inattention,” Goffman, 1963)という語で表しているが、システムの拘束から見れば、話者がいかに大声で叫んでいようと、聴者は回路を開けて応答しない。それがこの社会での適切なボナンゴに対する対応である。

4) 南部アフリカ、カラハリ砂漠に住む狩猟採集民ブッシュマンの一言語集団グイの事例。グイの人々の日常生活を15年以上も調査する菅原(1997, 1998a, b)は、彼らに特徴的に見られる同時発話の興味深い事例を数多く報告している。菅原に従えば、同時発話は以下の3種類に分けられるが、第3番目にはさらに下位に2つの形態がある。

- i) 協調的—親密な間柄の者同士の発話中に生じることが多く、とくに同一音で斉唱(ユニゾン)するような場合。
- ii) 対立的—対立者が相手の話しに聞く耳を持たないことを示すため、相手の主張をかき消すように真っ向から激しく自身のことを被せるような場合。
- iii) 並行的—a) 相手が喋っているのに喋り出す。
b) 相手が喋り出しても、喋りやめない。

この分類のうち、iii-b 以外は、地球上のあちこちで見られる現象である。しかし、グイに特徴的なのは iii-b である。菅原によれば、グイの人々の関係は非常に濃密で、記憶の共有部分が多く、親子、兄弟姉妹、恋人、家族・集団間などの経験が、しばしば共に繰り返される語りとまでなっている。そして、iii-b では、別々の語りが話者と聴者という関係を超えたかのように並行して話し出され、その間にまた、瞬時、両役割が表層に浮上して、相手の話しに同調したり対立したりする。この並行的発話が昂進すると、発話の形態はひとつにとどまらず、唱和、ひきとり、復唱も間に入れ、融通無碍に変化することがある。そのようになると、グイの人々にとって Goffman のシステムの拘束のうち、とくに②、④、⑤、⑥、⑦は、もはや拘束ではなくなる。話順交替で必要な聴者、話者の区別もなく、互いに熟知した語りには推論の要もほとんどない。それは、他者の存在を目前にしなが、自在に、自己中心的に、そして、大枠では他者との交感を通して、ハーモニーを創り上げている。筆者には、グイの人々の並行的同時発話が、米国の黒人を中心とするジャズの即興演奏に響くことがある。

Goffman のいう儀礼的拘束が大きく文化的要素に係わることを示すた

めに、4事例を引いた。儀礼的拘束は対人間の関係性に係わって変容し、同時にシステムの拘束に影響を及ぼす。そうした影響による会話のシステムの変化は、各事例の中に簡単に記した。発話の話順交替に慣れきった読者には、事例は奇異に映ったかもしれないが、それは小論の目的ではない。理論的視点に立つならば、事例は僅かながら、まさに相互行為というもの、**「二重の偶有性」** (“double contingency”, ルーマン 1977) よって成り立つことを鮮明に例証する。各事例は異文化コミュニケーションにおいては、他者の応答に対する予測の困難性が拡大することを見せてくれている。そうした困難があるにもかかわらず、異文化コミュニケーションも Goffman のいう両拘束を内包するメカニズムを用いて行なわれるのである。

Goffman のいう会話のメカニズムに内包される両拘束についてのまとめとして、それがメタ・コミュニケーションに大きく係わることを記しておく。コミュニケーションは、互いの知覚野に係わり合うことを相互に認識することで遂行できる(ベイトソン、ロイシュ 1989)。すなわち、メタ・コミュニケーションとは、遂行するコミュニケーションを観察者の立場から見て、その流れを調整することである。流れの調整には、発話の解釈のための信号を送ることも含まれるので、当然、話者と聴者の関係についての声明もメタ・コミュニケーションに入る。

5 おわりにかえて

小論の目的は、コミュニケーション現象の複雑さを解明することであった。そのために、コミュニケーションの基本的なメカニズムについて、同じ文化的背景を持つ者同士の相互作用も異文化コミュニケーションでも同じであるが、それは多様に変容でき、後者のプロセスがより複雑になる可能性があることを示そうとした。目的のために Goffman の相互作用研究の枠組みを活用した。無論、コミュニケーション・メカニズムの全容の記述にはいたっていないが、通常、人は誰もがコミュニケーションのための同じ装置を体内に持つこと、そして相互作用現象が複雑であることは、ある程度まで提示できたのではないだろうか。異文化の人々ともコミュニ

ケーションをするには、人は身体に備わった諸感覚をその目的のために発達させて構成したメカニズムに頼らざるを得ないのである。

小論で用いた Goffman のメカニズムに内包される両拘束は、互いに影響し合い柔軟で、どの文化の人々の相互行為の分析にも活用できるようである。そして、そのメカニズムは話順交替システムを基本に構築されていた。世界にはさまざまな発話形態があり、話順交替システムもそのひとつであるが、この形態は上記 4 事例の文化の人々によっても使用されている。この発話形態について、研究者ら (木村 1997; Sacks, 1992; 菅原 1998 b) は、普遍的といてよいのではないかと主張している。話順交替システムは、他者が話しているときに話すと聞きづらいという認知的制限を排除した効率的な発話形態で、新しい情報を得るのに最適である。他者が「協調原理」を遵守し関連性のある刺激を伝達してくれると確信して推論を行い、新しい情報を得ることは人の生存に不可欠なのであろう。人類が絶え間なく変化する環境に対応していくために、この発話形態を発展させてきたのではないかと考える。

しかし同時に、話順交替システムの一層無駄の削ぎ落とされた「線的」で「論理的」な形態は、合衆国を中心とする西洋キリスト教圏、および今日の科学の世界に特徴的な発話形態である。それらの文化圏では冗長性、不透明性、不合理性は蔑視の対象となることが多い。コミュニケーションは新しい情報を得るためばかりでなく、4 節でも見たように、時に人は伝達の回路を遮断しても社会関係を維持したり (事例 2, 3)、情報よりも共に在ること、交感を目的とする (事例 4) こともある。しかしながら、今日の技術社会は、情報取得を目指すよりスムーズな話順交替システムの発話形態を重視する傾向にあると言えるようである。

そのうえ、「協調原理」を遵守した関連性のある話順交替システムは、異文化コミュニケーションでも頻繁に使用されている。異文化においても、現地の人々と関係性を重視した交感的な相互作用が理想であり、時に、それは可能である。また、異文化の人々の生活もわれわれのものとは変わりがなく、交感的な相互作用を通して経験の共有を広げ積み上げていくこともできる。にもかかわらず、異文化での訪問者はしば

しば観察者の立場にあり、現地の人々に特徴的な発話形態に遭遇すると、その含意を知るために、多大の「処理努力量」を払わねばならないことが多々ある。それは単に文化が深く絡む象徴表現だけにかかわらず、百科事典的知識についてすらも、現地の人とは情報量が圧倒的に違うからである。明確な認識にいたるまでいかに長い時間がかかっても、異文化を理解するには、その地の文脈情報が必要で、その過程は推論であることが多い。異文化状況では、情報収集にあることが多く、話順交替システムが重用されるのではないだろうか考える。

さらに、小論では文化により多様な発話形態があることも見たが、それは読者に奇異な印象を与え、「われわれ」と「彼ら」の境界を明確にするためではなかった。そうした文化的な多様性は、一方で異文化コミュニケーションのプロセスが一様でないことを暗示しているようである。このプロセスの解明には更なる実証研究が続けられるべきである。他方、多様な発話形態の存在は、人が無限にも思える潜在的な可能性 (potentiality) を持つことを示唆してもいる。Goffman の両拘束が大変柔軟で、4 事例のようなある意味で極端に見える発話形態にも形を変えて対応できるということは、人の身体に可塑性の装置が埋め込まれてあることが意味されている。一層の多文化社会の到来が予想される今日、異文化コミュニケーション論の学徒は、異文化における多様な発話形態の持つ意味を、自らの属する文化的フィルターを通してのみ解するのではなく、多面的に深く考えるべきである。

最後に、コミュニケーションを行うということは、確かに Sperber と Wilson が言うように、互いに共通する認知環境を増大させる。しかし同時に、話し合うことで、話しを続けるために要する共通の認知環境の少なさに気づく(谷 1997) ことも事実である。発話理解のプロセスは、話者の意図がそのままに記号化されて送られるのではなく、そこからは何重にもある乖離を推論で埋めるという危うさで成り立っていた。異文化コミュニケーションの誤解やディスコミュニケーションに至りやすい陥穽に関する理論的研究は、稿を改めたい。

注

- 1) 本論では、コミュニケーション、相互作用、伝達という語を同じ意味をもつ語として使用する。相互行為という語も使用するが、これはコミュニケーションを成り立たせている連鎖する行為である。
- 2) コードとはメッセージを信号 (signal) と対に組み合わせて、それが人間であれ機械であれ、2つ情報処理装置の間で意志伝達を可能にする体系である。人の伝達にかかわるコードとして簡単なものはモールス信号があるが、複雑なものとしては言語があげられる。言語の場合はそのような対を生成する記号と規則の体系からなる。
- 3) Goffman は言語学や会話・談話分析それぞれが使用する基本的な分析単位は各分野の学問の追求する目的に合致するものであり、相互作用論にも有用な面があることを、“Replies and Responses” (1976) と *Forms of Talk* (1981) で繰り返し述べている。とくに会話・談話分析の「隣接対」の概念も含まれるであろう形式的な分析 (formalistic analysis) 単位についても、話しの連鎖の研究に役立つことを明記し、さらに分析の仕方により相互作用研究に有益であると論述している。しかし同時に、それらを相互作用論から見た場合、分析の単位として不適切になることも重ねて言及している。その1例として *Forms of Talk* から、次の「隣接対」と形式化された儀礼的やりとりに対する批判を引用しておく。“Bringing together these various arguments about the admixture of spoken moves and nonlinguistic ones, we can begin to see how misleading the notion of adjacency pair and ritual interchange may be as basic units of conversation.” (p. 48) (なお、小論が大きく依っている “Replies and Responses” (1976) は、*Forms of Talk* の第1章に再録されている。)
- 4) “reach” の概念は、米国を中心とする「線的」(linear) で「論理的」(logical) でない第4節に見るような異文化における日常会話の分析に有用である。たとえば日本においても、京都のような長い歴史のある都市では、特に旧家と言われなくても長年の姻戚関係にある家族を見出すのは容易で、彼らの身内同士の会話には何十年も前に生じて現在に到るまで語り種になっていることなどが、時に突然に引用されるようなことがあるために。

引用文献

- ベイトソン、G.、ロイシュ、J. (1989) 『コミュニケーション——精神医学の社会的マトリックス』思索社。[原著: Ruesch, J., & Bateson, G. (1951). *Communication: The social matrix of psychiatry*. W. W. Norton & Co., Inc.]
- 木村大治 (1997) 「相互行為における打ち切りのストラテジー」谷 泰 編 『コミュニケーションの自然誌』(414-444 頁) 新曜社。

- ルーマン、N. (1977) (村上淳一、六本佳平 訳) 『法社会学』 岩波書店。[原著: Luhmann, N. (1967). *Rechtssoziologie*. Reinbeck bei Hamburg.]
- オルテガ、G. (1989) 『個人と社会——人と人々』 白水社。[原著: Ortega y Gasset, J. (1957). *El hombre y la gente*.]
- 菅原和孝 (1997) 「会話における連関性の分岐——民族誌と相互行為理論のはざまで」(213-248 頁) 「関係と交渉のプラグマティックス」(369-413 頁) 谷 泰 編 『コミュニケーションの自然誌』新曜社。
- 菅原和孝 (1998a) 『語る身体民族誌——ブッシュマンの生活世界』 京都大学出版会。
- 菅原和孝 (1998b) 『会話の人類学』 京都大学出版会。
- 谷 泰 (1997) 「だれそれはしかじかであることを知らない」 谷 泰 編 『コミュニケーションの自然誌』(85-129 頁) 新曜社。
- Blakemore, D. (1992). *Understanding utterances: An introduction to pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- Bruner, J. (1983). *Child's talk: Learning to use language*. Oxford: Oxford Univ. Press. [邦訳: (1989) 『乳幼児の話しことば——コミュニケーションの学習』 新曜社。]
- Carbaugh, D. (Ed.) (1990). *Cultural communication and intercultural contact*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Pub.
- Clark, H., & Marshall, C. (1981). Definite reference and mutual knowledge. In A. Joshi et al. (Eds.), *Elements of discourse understanding* (pp. 10-63). Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Collier, M. (Ed.) (2000). *Constituting cultural difference through discourse. International and intercultural communication annual, XXIII*. Thousand Oaks: Sage.
- Goffman, E. (1963). *Behavior in public place*. New York: The Free Press.
- Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experiences*. Boston: Northeastern Univ. Press.
- Goffman, E. (1976). *Replies and responses. Language in society, 5*, 257-313.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, C. (1981). *Conversational orientation*. London: Academic Press.
- Grice, H. (1975). Logic and conversation. *Syntax and semantics: Speech Acts 3* (pp. 41-58). New York: American Press.
- Gudykunst, W., & Kim, Y. (1984). *Communicating with strangers: An approach to intercultural communication*. New York: McGraw-Hill, Inc.
- Jefferson, G. (1972). Side sequences. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in social*

- interaction* (pp. 294-338). New York: Free Press.
- Knapp, K. et al. (Eds.) (1987). *Analyzing intercultural communication*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Mead, G. (1934). *Mind, self and society: From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: The University of Chicago.
- Mehan, H. (1978). Structuring school structure. *Harvard educational review*, 48, 1, 32-64.
- Moerman, M. (1990). Studying gestures in social context. *Senri ethnological studies*, 27, 5-52.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on conversation*. Oxford: Blackwell.
- Sarbaugh, L. (1988). *Intercultural communication* (2nd ed.). New Brunswick: Transaction Books.
- Scollon, R., & Wong-Scollon, S. (1990). Athabaskan-English interethnic communication In Carbaugh, (pp. 259-286).
- Sperber, D., & Wilson, D. (1986). *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell. [邦訳: (1993) 『関連性理論——伝達と認知』研究社出版] (翻訳は邦訳に依った。)
- Young, R. (1996). *Intercultural communication: Pragmatics, genealogy, deconstruction*. Philadelphia: Multilingual Matters.